

プレコンセプションケア④

妊娠する前に知っておきたい
女性の特有の病気のこと

子宮頸がん

女性特有の病気(婦人科疾患)について

- 女性特有の病気があります。頻度は低くても妊娠の成り立ちや妊娠経過に影響する場合があります。

これらの病気の影響を

①その病気が妊娠に与える影響

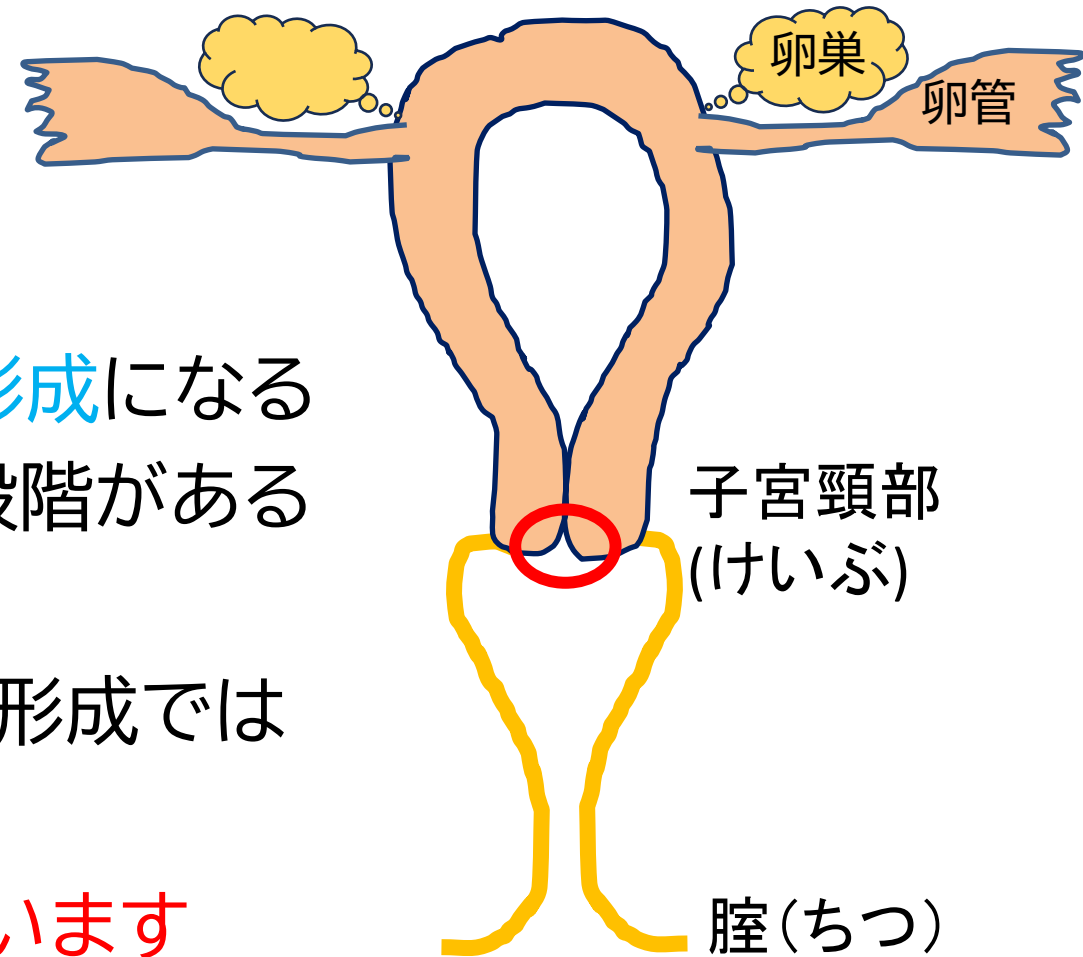
②妊娠がその病気に与える影響

にわけて考えます。

今回は、**子宮頸がん**についてです。

異形成から子宮頸がんへ

- 子宮頸がんは右図の ○ 子宮頸部で HPV(ヒトパピローマウイルス)の持続感染から発生する
- 持続感染すると細胞変化が起き、**異形成**になる
- 異形成は、**軽度**→**中等度**→**高度**の3段階がある
- 軽度異形成は自然治癒もある
- 中等度異形成では**約10%**が、高度異形成では**約20%ががん**に進行する
- **年間約3000人の女性が亡くなっています**



ヒトパピローマウイルス(HPV)感染について

- HPVはありふれたウイルスである
- 性交渉によって、ほとんどの女性(約80%)が、一度はHPVに感染し、ほとんど(約90%)は自然に消える
- ハイリスクHPVが子宮頸がん発生に関わる(HPVには悪い型がある)
- 子宮頸部はもともと細胞の変化が起きやすく、HPV感染しやすい
- 免疫や喫煙などの要因が加わり、高度異形成やがんに進行する
- HPV感染からがん発生までには数年から数十年くらいの期間を要す
- 子宮頸がんは、HPVワクチンの接種により予防が可能
(小学校6年生から高校1年生の女性は、公費定期接種の対象です)

①子宮頸がん、異形成が妊娠に与える影響

妊娠前に診断された異形成、初期がんなら、**子宮温存可能**(子宮頸部の部分切除)ですが、あきらかな浸潤がんでは**子宮摘出**が提案されますので、妊娠できなくなります。

妊娠後、初期に子宮頸がん検査を実施しますが、妊娠前の診断が望ましいです。妊娠中の手術は出血量が多くなりますので、できるだけ避けるべきです。

②妊娠が子宮頸がん、異形成に与える影響

一般的に妊娠中の細胞検査は、**過小評価**されやすいので注意が必要です。妊娠により、異形成や初期がんが浸潤がんに進捗しやすいということはないようです。

おすすめ!

1. 対象年齢で、HPVワクチン接種し、発生予防
2. 20歳からは子宮頸がん検診
異形成までの段階で診断することが大切です。
必ず、定期的に検査を受けましょう。
(正常であっても2年に一度)